

令和5年度 校長だより 第9号

1 今年もあとわずか

令和5年も、残すところあとわずか。今年の秋は気温の高い日が続き、つい最近まで半袖でも過ごせるくらいでしたが、一気に冬の訪れを感じるようになりました。それにしても、時間の経つのは本当に早いものだと思います。今年やりたいと考えてそのままになっていることを、ひとつでも実現して、新年を迎えたいものです。



2 「馬鹿になること」

最近読んだ本に書かれていた内容の一部を紹介したいと思います。

いささか唐突な言い方ではあるが、受験勉強を勝ち抜くための必要条件は「馬鹿」になることである。その時期には受験勉強の意味だとか、人生の意義やら目標といった大問題を深刻に考えてはいけないのである。ただ阿呆のように、志望校突破だけをひたすら思い続け努力することにつきる。それ以外に必勝法はない。そのような馬鹿たりうる人間だけがこの戦争に勝つ。

馬鹿になること。これが受験に限らず人生の様々な局面で、成功のための重要な鍵となることが多い。どの分野に進もうと、その道での第一人者と言われる人はほぼ例外なく馬鹿である。(中略)

馬鹿になることはむずかしい。そうなれることはそれ自身、偉大な才能であるとさえ言ってよい。多くの人はなかなか馬鹿になれない。だから一流にはなれない。健全な常識や良識を十分に備えた人間が馬鹿になり切ることは容易でないのである。逆に言えば、一流と呼ばれる人々のほとんどは、何らかの点で、社会通念的には不健全あるいは異常と見なしうる特徴を持っている。

馬鹿になれる人だけが世の中で成功しているというのは冷厳な現実であり、ある意味では悲しい現実であると言えるかもしれない。

なぜ馬鹿になることがそれほど決定的に重要なのだろうか。この答は簡単だ。各個人の潜在的な能力というものが伯仲しているからである。馬鹿になった時に初めて、それによってもたらされる狂気が、当人の眠っていた能力を揺り起こし、それを無限大へと発展させるドライヴィング・フォースとなる。天才とか一流と言われる人々を身近に見ているとそう思えて仕方がない。

それではどうしたら馬鹿になれるかという問題になる。ごく自然になれる人は最も恵まれた人であるが、そうでない人でも短期間なら馬鹿になることが出来る。それにはある種の自己暗示が効果的と思われる。私も受験時代には、一年ほどの間、誰に教わった訳でもないがこの方法によって完全な馬鹿になっていた。おかげで全く無邪気にガリ勉をすることが出来た。そして合格した。一方、長期間にわたって馬鹿でいられるための効果的方法に関しては私は知らない。実際そんなものがあるのかどうかも確かではない。日本中が一流だらけになっては住みにくくて困るから、そんな方法がなくて丁度良いのかも知れない。

(藤原正彦著『数学者の言葉では』から)

3 令和5年度オープンスクール

11月18日(土)、「令和5年度オープンスクール」を開催しました。今年は事前予約などを不要にし、大勢の中学生と保護者の皆さまが参加してくださいました。

授業参観、施設見学や部活動見学、理数科説明会に加え、学校説明会&学校紹介動画上映、個別相談を行いました。大変熱心で、本校に対する期待の大きさを実感しました。

桜の咲くころ、夢と希望に満ちた皆さんにお会いできるのを、心から楽しみにしています。

